

いけ)がある。天香久山、歌枕。

注(5) 国の形勢を高い所から望見すること。

注(6) 秋津洲・秋津島・蜻蛉洲。日本国の異称。神武天皇が大和国の山上から国見をして「蜻蛉〔あきづ〕のとなめせるが如し」と言ったという故事による。「となめ」とは後嘗〔あとなめ〕の略で、蜻蛉〔とんぼ〕の雌雄が交尾して互に足をふくみ合い、輪になって飛ぶこと。「あきつしま」はまた、大和国の異称。

注(7) 第34代舒明天皇。忍坂人大兄皇子の王子。西紀629年即位。飛鳥岡本宮に都。在位13年で崩御。593～641。

注(8) 「むら〇〇」型の日本語に、「むら」(村。人が群がり住んでいるところ)・「むら菊」・「むら雲」・「むら草」・「むら松」・「むら声」・「むら雨」・「むら時雨」・「むら薄」・「むら雀」・「むら苗」など数多くある。

資料 群山第1巻第1号(東北アララギ会群山発行所)

97. 「言い訳の楓」とは

問 「言い訳の楓」とは、何処にあって、どのような由来のものか。

答 伊達家第4代綱村が、生母三沢初子⁽¹⁾が生前護持した釈迦像を安置し、母の冥福を祈るとともに、その功德を衆人にあまねく及ぼすため、元禄8年〔1695〕、城下東郊榴岡⁽²⁾に地を選び釈迦堂⁽³⁾を建立しました。そして、その境内を庶民遊樂の地とするため、京都清水から1千本の枝垂桜を取り寄せて栽えたといわれます。この桜は、当地ではかつて見られなかった珍種だったので、植え立てに従事した足輕組頭某⁽⁴⁾が、1本だけ失敬して持ち帰り、自宅の庭に栽えてしまったということです。作業が完了して本数検査が行われることになったので、その足輕組頭は、手近にあった楓を1本引き抜いて行って、土手の上に植え、咄嗟の言い訳の気転で員数調べの関門をパスしたという話が伝わっています。この時の楓は、榴岡南端の土手の上に残っている老木で、「言い訳の楓」であるといわれてきました。

「言い訳の楓」について記されたものは、下記の通りです。

1. 「仙台郷土史夜話」(三原良吉)

『武家屋敷の庭樹—言いわけのモミジ』

馬場の堤に桜だけを植えることは將軍家に限られた格式であったが、伊達政宗⁽⁶⁾が追回しに馬場を設けた時、それを知ってか知らずか、桜だけをうえて桜の馬場と称した。これが幕府の隠密〔おんみつ〕に見つかって報告されたため、公義〔儀〕からおとがめを食った。政宗ちっとも驚かず、松と

楓〔カエデ〕を申しわけばかりうえて「松もモミジも候」と回答したという話がある。元禄八年の春四代藩主綱村が生母浄眼院の護持仏釈迦如来像を安置する釈迦堂を造営した時、境内に馬場を設け京都清水から枝垂桜と彼岸桜合わせ千株を取り寄せて集植し、家臣の馬術、弓銃の訓練と、花時の士民遊楽の場所としたが、この時は最初から計画的に楓若干をうたと記録にある。枝垂桜は神仏降臨のヨリシロとしては至上の植物で、当時この桜は仙台にはなかったので珍しかったであろう。従ってこの時分植したというのが桃生郡鹿股、二千石の瀬上氏廟のある欠山〔かけやま〕のふもと(7)に一本、浄眼廟〔びょう〕、榴ヶ岡天満宮(10)、根岸の旧観音堂にある。この時、植え立てに従事した足軽の一人が、千本あまりもあるのだから一本ぐらいくすねても知れまいと思って一本失敬して南五十人町の自宅の庭に植えた。ところが植え立て終了とともに役人が検分に来て一本ずつかぞえ始めたので、あわててその辺から楓を一本抜いて来て土手の上の隅にうえたが、役人は一本足らぬ、どうしたという。足軽は「見上げ桜も風流と存じまして」と土手を指さした。見ると楓だ。役人思わず笑って「その方なかなか風流な奴」と見のがした。これを言いわけのモミジとって仙石線榴ヶ岡駅へ下る坂の上、西角に現存している。』

2. 「仙台民俗誌」（三原良吉。「仙台市史」第6巻の内）

『言訳の楓 榴ヶ岡

榴ヶ岡は四代の仙台藩主綱村公が母公浄眼夫人三沢初子の菩提のために元禄八年母公の護持仏を安置する釈迦堂を建て、その境内を庶民遊楽の地とするため、その前年元禄七年に清水の地主桜一千本を京都から取りよせて栽えたのが今の枝垂桜である。この時、栽え立てに従事した足軽組頭の佐藤某というのが珍らしさのあまり苗木を一本くすねて自宅の庭に植え、そしらぬ顔をしていた。ある日役人が植付数を検分に行くから立会へ〔え〕という沙汰で、突然のことにあわてた某はその辺から楓を一本持って来て代りに栽えて置いた。役人が九百九十九本まで算えて土手の下まで来た時、桜の全部が平地に栽えてあるのに一本だけが土手の上の端にある。某は苦しまぎれに「高い所の見上げ桜も別段と存じまして」と言い訳をすると「すりや其方の桜は見下げ桜であろうな」と図星をさしたまま何の構いもなかった。それ以来この楓を言訳の楓と呼ぶようになった。この楓は高さ約四丈、幹囲一丈三尺ばかり榴ヶ岡南端の土手の上に残っている。くすねた一本は某の子孫の住む(11)百人町八一の庭にこれも残っていて、この方は高さ二丈五尺ばかり幹周一丈三尺ほどある。』

3. 「伝説」（三原良吉。「宮城県史」21の内）

『言い訳の楓 仙台、榴ヶ岡

元禄八年釈迦堂に枝垂桜を植える時、植えつけの足軽の一人が一株くすねて自分の庭に植えた。役人が検視に来て九百九十九本まで算えたが、足軽はあわてて楓を一本抜いて来て土手の上の端に植えた。役人が残りの一本がどこにあるかと問うと、足軽は指さして見上げ桜も風流と存じまして、と答える。役人は苦笑して、そのままにおとがめがなく、以来言い訳の楓とって今は大木になっている。』

- 注(1) P. 71 の注(3)参照。
- 注(2) P. 575 の注(4)参照。
- 注(3) P. 489 の「167「榴岡」を「つつじがおか」と読ませるのは何故か」参照。
- 注(4) P. 71 の注(3)。P. 575 の注(5)参照。
- 注(5) 足輕 1 組 (定員 30 名) の長。
- 注(6) P. 170 の注(1)参照。
- 注(7) せのえ。家格御一家。桃生郡深谷鹿股邑で 200 貫の知行を受けていた。「御一家」については P. 66 の注(7)参照。
- 注(8) 桃生郡河南町鹿股にあり、北上川の流れて迫って断崖をなす丘陵、風光が雄大佳鹿であるので、林子平の知己藤塚知明が鹿股字梅木に幽閉された時、欠山を佳景山と雅称した。国鉄女川線にこの名の駅がある。P. 260 の注(4)をも参照。
- 注(9) 仙台東九番丁孝勝寺にある。
- 注(10) P. 398 の「143.天満宮の榴岡への移遷について」参照。
- 注(11) 1 丈 = 10 尺、1 尺 = 0.33 メートル。
- 資料 仙台郷土史夜話 (三原良吉)
 仙台民俗誌 (三原良吉。「仙台市史」第 6 巻の内)
 伝説 (三原良吉。「宮城県史」21 の内)

98. 伊達政宗と伊達男

問 「伊達男」というのは、伊達政宗の豪華好みが特に人目をひいたことから始まったのだと聞いています。本当でしょうか。

答 伊達男と伊達政宗とは、全く関係ありません。如何にも尤もらしいこじつけですので、世間にはかなり流布しているかのようですが、何等の根拠もないことでもあります。

第一の、伊達男の「伊達」は、物事を立て通す意味の語「立つ」の名詞形「立て」に、伊達の漢字を当てただけのものです。

「大言海」(大槻文彦)に、

『だて(名)伊達〔たてだてしきノ上下略シテ濁ル、男ヲ立ツル意。即チ男立、腕立、心中立ナドヨリ移ル。世ニハ政宗卿ノ部兵ノ服装華麗ナリシニ起ルト云ヘド、此語、政宗卿ノ時代ヨリハ、古クアリシガ如シ、且ツ慶長ノ頃マデハ、伊達氏ハいだてト唱ヘタリ〕